2024年12月15日 礼拝メッセージ

聖書:イザヤ書11章1～9節
説教:エッサイの根株から

はじめに
　アドベンドの第三週を迎えております。旧約の時代、人々はどのようにして救い主を待ち望んでいったのか、イザヤ書を開きながら考えております。前回のおさらいを簡単にします。イザヤが罪を告白し、燃える炭火が唇に触れて彼の罪は赦された後で、イザヤは主の呼びかけに応えて預言者として召されていきました。ところが主は困惑するようなことを語る。イザヤがみことばを語っても、この民たちは悔い改めないと言うのです。驚いたイザヤは「主よ、いつまでですか」と尋ねます。そうすると主はこう言われた。「焼き払われた町に一つの切り株が残る。この切り株こそ、聖なる裔となる。」聖なる裔、すなわち救い主が来られるのだと告げられました。でも聖なる裔と言われてもピンときません。私たちは、イエス・キリストだ教えられてはいますが、もっと具体的に示してもらうとありがたいわけです。そこで今日開いている11章になります。聖なる裔なる方について、もっと詳しい説明がここにある。ともに見てまいります。

１　エッサイの根株から
１）ダビデの父
　1節を読みます。「エッサイの根株から新芽が生え、 その根から若枝が出て実を結ぶ。」
　エッサイとは何者なのか。そのことを知るために、イザヤのときからおよそ260年前のダビデの時代にさかのぼることになります。当時のイスラエルの王であったサウルは最初は謙遜でしたが、じょじょに高慢になり主のみことばに逆らうようになる。それを見ていた預言者サムエルが落胆していたとき、主はこう語るのです。第一サムエル記16章1節。「いつまであなたはサウルのことで悲しんでいるのか。わたしは彼をイスラエルの王位から退けている。角に油を満たせ。さあ、わたしはあなたをベツレヘム人エッサイのところに遣わす。彼の息子たちの中に、わたしのために王を見出したから。」
　それでサムエルはベツレヘムにいるエッサイの所へ行き、あなたの息子たちを見せてくださいと言う。するとエッサイは七人の息子をずらりとサムエルの前に並ばせます。サムエルは一番上の兄息子の姿かたちが立派なのを見て、「きっとこの者が主に選ばれている」と思うのですが、主は「いや彼ではない」と言われる。では次男のほうかと思ったらそれも違う。結局七人全員が不合格と言われた。困ったサムエルはエッサイに尋ねました。「子どもたちはこれで全部ですか。」そうすると「まだ末の子がいるけれど、いま、羊の番をしている」と答える。「末の子はまだはなたれ小僧なので、サムエル先生と食事の席に座る者ではない。」おまけにいまは羊の世話をしていて汚れている。それでエッサイは末の子は除外したらしいのです。ところがサムエルはその子を呼んできなさいと言って連れて来させる。その子どもというのが、後のイスラエルの二代目の王となるダビデだった。エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。救い主はダビデの子孫として来られることがこれで示されました。

２）マリアの夫ヨセフ
　では本当にそうなったのか。こんどはルカの福音書を見てみます。天使ガブリエルがマリアの所を訪れてこう告げた。「あなたは身ごもって、男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。」そのときマリアの結婚相手はヨセフと決まっていたけれど、まだ婚約したばかりだったので、マリアは大変困ってしまうわけですが、今日はそのことはわきに置きましょう。日本では、いまは夫婦別姓という話しもありますが結婚すると妻は夫の姓に変えるのが一般的です。男性が家を継ぐという意識があるからです。実はユダヤの文化も同じです。この場合、マリアではなくてヨセフがダビデの家系に属していたのかが問題になる。日本なら名字でだれがどの家の者か分かりますが、ユダヤには名字という習慣はない。ではヨセフの家系はどのようにしてわかるか。そこで登場するのが、ローマ皇帝から出た命令です。自分の先祖の町にある役場で住民登録せよという。それでヨセフが向かったのがベツレヘムでした。ダビデの父親エッサイの住んでいた町。そこが彼の先祖の町だったから。こうして、救い主はイザヤが語ったとおりに、エッサイの子孫、ダビデの子孫として来られたことが確認できました。でも疑い深い人は、それは偶然の一致だと言うかもしれない。ほかに証拠はないのか。もちろんあります。

２　この方は

１）見るところによらず、聞くところによらず

やがて来られる方はどんな方か。3，4節。「この方は主を恐れることを喜びとし、 その目の見るところによってさばかず、 その耳の聞くところによって判決を下さず、正義をもって弱い者をさばき、 公正をもって地の貧しい者のために判決を下す。口のむちで地を打ち、唇の息で悪しき者を殺す。」

東京に住んでいたとき、「どこの出身ですか」「親の職業は」と聞かれたことがあります。「岩手です」「農家です」と答えると、「ああ」と言うような冷ややかな視線で見られました。まさに目で見るところ、耳で聞くところで人を判断されたわけです。ところが救い主である方はそうではない。「正義を持って弱い者をさばきます。」「弱い者をさばく」と聞くとびっくりするかもしれません。もちろん弱い者にひどいことをするという意味ではない。理不尽な理由でこの世から差別され、冷たくあしらわれていた人たちを主が救い、きちんとあるべき所に戻してくださる。そのような意味です。人が人を憎み傷つけ合うような世の中を見ると悲しくなります。また人と比べて、自分はあれもできないこれもできない、そんな劣等感に苦しむこともあります。しかし主は低い者を高くされ、高い者を低くされます。そのようにしてこの世界を回復させてくださいます。

２）被造物の和解

救いは人間だけではなく、被造物の世界にも及んでいきます。7節です。「雌牛と熊は草をはみ、その子たちはともに伏し、獅子も牛のように藁を食う。」熊と雌牛が一緒に草をはむ。ライオン獅子が草を食べて満足する。まるで子どもの絵本や童話に出てきそうな現実離れした光景です。しかし実は話しが逆なのです。私たちは頭から熊は人を襲うもの、ライオン獅子はほかの動物を襲って肉を食べるもの、そう思い込んでいる。ところが、創世記で1章30節にこうある。「生きるいのちのある、地のすべての獣、空のすべての鳥、地の上を這うすべてのもののために、すべての緑の草を食物として与える。」本来は熊も獅子も草食動物で、人に害を与えるものではなかった。なので熊が雌牛と一緒に草を食べるのは、実は本来の姿になっただけ。このように救い主は、苦しんでいる被造物の世界をもとの状態に回復してくださるというのです。罪の影響は個人一人のことではなくて、この自然界にも深刻な問題を与えるほど深刻だということです。いま環境問題が大きく取り扱われています。ここ数十年の間に現れた新しい問題のように思われていますが、そうではない。さかのぼることアダムの時からの問題だった。みな環境問題をなんとかしなければと知恵を出し合っています。しかし、人の知恵では絶対に解決はできない。なぜなら私たちの罪が原因だからです。環境問題も人間の罪が深く関わっている。ですから真の解決は主イエス・キリストにしかできない。

３　救い主

１）乳離れした子＝若枝

では救い主はどのようにして私たちの罪を解決し、被造物の世界を回復させてくださるのでしょう。きょうの箇所にはなにも書かれていないように見えます。そこで8節に注目します。「乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、 乳離れした子は、まむしの巣に手を伸ばす。」ここは7節と同じように被造物世界の回復の様子だと思う。でも、よく見ると不思議なことばがここに二つあるのです。一つ目は、8節最初の「乳飲み子」と訳されていることばです。これは同じイザヤ書の53章では「ひこばえ」と訳して出てくる。「ひこばえ」とは、木の根株のわきから新しく出てきた芽のことです。「エッサイの根株から新芽が生え」と同じ。そすると「乳飲み子」は、「エッサイの根株から生えた新芽、若枝」と読み替えることができます。その方が、まむしの巣に手を伸ばすというのです。公園や山に行くと「まむし注意」の立て札があるほどの危険動物で。そこへ若枝である方が手を伸ばす。どういうことか。

２）蛇の頭を打つ

そこで二つ目は「まむし」ということば着目します。詳しいことは省きますが、聖書を調べると「まむし」と蛇、ことばは違いますが意味には大きな違いがないようなのです。そうすると、9節はこうも読めるのではないか。「エッサイの根株から生え出た若枝は、蛇の巣に手を伸ばす。」けれども「これらは害を加えない。」危険なはずの「まむし」が、どうして害を加えないのか。

そこで創世記3章15節で、神である主はどのように約束してくださっていたかを思い起こします。「わたしは敵意を、おまえ（蛇）と女の間に、おまえの子孫と女の子孫の間に置く。 彼はおまえの頭を打ち、 おまえは彼のかかとを打つ。」

彼といわれる方は、ダビデの子孫としてお生まれになったイエス・キリスト。この方が蛇の頭を打って滅ぼす。だからもう害を加えることはなくなる。

どのようにしてそういうことになるのか。「おまえ（蛇）は彼のかかとを打つ。」それは良いのですが、決して無傷で終わらないということも最初から言われていた。「おまえは彼のかかとを打つ。」救い主のからだが十字架で裂かれ、血を流される。そのようにして私たちを罪から救ってくださる方を、あなたがたは待ちなさい。

３）一貫して変わらない神の救いの約束

　クリスマスというと、二千年前に救い主が来てくださった、おめでとう。そんなところにばかり目が留まりますが、もっと意味が深い。今日見たとおり、救い主である方が私たちのところへ来てくださるという約束は、創世記から始まってイザヤに到るまでずっと一貫して変わらないことを確認しました。人間がする約束は、突然変更されたり、なかったことにさえなることがある。でも神の約束は何千年経とうとも変わらない。だから神は真実だというのです。私たちの目には今は見えないかもしれない。すぐには実現かもしれない。けれども、それでも主の約束を待つことができる。たとえこのからだが弱くなり、明日いのちが果てることになっても、なお信じて待つことができる。このように信じる信仰を与えてくださる主に感謝します。